

メッセージアウトライン ヨシュア記24:1～33 「主を恐れ、主に仕えよ」

ヨシュアとイスラエルの民は神の約束されたカナンの地に入り、その地を占領し、カナンの地の民を次々と滅ぼしていった。神はカナンの地の民の長年にわたる罪深い生き方を、出エジプト以来、神の民として育て、整えられたイスラエルを用いてさばきをなされたのである。

イスラエルは部族ごとにカナンの地に住むようになり、ヨシュアは年を重ねて老人になっていた。しかしまだ占領すべき地、戦うべきカナンの民は残っていた。ヨシュアは自分の死ぬ時が近づいてきたことを知って、イスラエルの全部族を集め、伝えるべき大切なメッセージを語る。

[1]「シェケム」…ヨルダン川から約30キロメートル西の山地。エリコから北西に約40キロメートルの地。ここはイスラエルの先祖アブラハムが主の約束のみことばを信じて、このカナンの地に導かれてきた時、初めて神を礼拝するための祭壇を築いた場所であり(創12:6-7)、彼の孫のヤコブも妻と子どもたちを連れてメソポタミアのパダン・アラムから帰って来た時、やはりこの地で祭壇を築いた歴史的な場所である。(創33:18-20) 近くにはかつてヨシュアが祭壇を築いてモーセの律法にしるされている祝福とのろいのことばを民の前でことごとく読み上げたエバル山とゲリジム山があった。(ヨシュア8:30-35) この由緒ある記念すべき地に、ヨシュアはイスラエルの全部族を集めて、神の前に立たせて、彼らに伝えるべき大切なメッセージを語っていく。

[2] ヨシュアは過去に主なる神がイスラエルに対してなしてくださった救いのみわざから語り始める。それは2-13節にかけて語られているが、「イスラエルの神、主はこう告げられる」ということばから始まっており、ヨシュアが神に代わって語るという形式である。

「あなたがたの父祖たち、アブラハムの父でありナホルの父であるテラは昔、ユーフラテス川の向こうに住み、ほかの神々に仕えていた」

そこはカルデアの「ウル」という所であり、ユーフラテス川の下流にあり、バビロンの南東約240キロメートルの地で、ここは約BC2500年頃より繁栄した大きな町であり、多くの神々が祀られ、拝まれていたということが分かっている。(今日のイラクの領土内) テラはそこで偶像の神々を拝んでいた。そのような状態から神はアブラハムを選びだされたのである。

[3-4] アブラハムの子はイサク、イサクの子はヤコブとエサウ、エサウには死海の南東のセイルの山地が与えられたが、イサクの祝福を受け継いだのはヤコブであった。そしてヤコブとその子らはエジプトに下った。これはカナンの地の飢饉のためであ

ったが、すべては神のご計画のうちにあった。

[5-7] ここで言われているのは、長い間エジプトで奴隷状態となっていたイスラエル民族を主なる神がどのようにして力あるわざをなして導き出され、シナイ半島の荒野を四十年間導き守られたかということの要約である。

主がモーセとアロンを遣わし、十の災いをもってエジプトを打たれたこと、紅海の水を分けてイスラエルを渡らせ、後を追って入ったエジプト軍を水が元に戻ることによって全滅させられたこと、何も無い荒野で超自然的に天からのパン「マナ」と水を与え、時には肉をも与えて養われ、シナイ山では律法を与えられ、そのようにして守られ導かれたにもかかわらず、不信仰に陥った民が荒野の四十年の間に主のさばきによって死に絶えたこと。これらの出来事はすべて出エジプト記から申命記にかけて書かれている。

[8-10] ここはモーセの指導によって行われたヨルダン川東側での戦いと勝利の要約である。

アモリ人の王シホンとバシヤンの王オグはイスラエルによって打たれ、その国は滅ぼされ、占領された。→民数記21章

モアブの王バラクとの戦いではバラクは占い師バラムに頼んでイスラエルをのろわせようとしたが、主はかえって彼を用いてイスラエルに祝福のことばを語らせた。→民数記22~24章

[11-13] ヨルダン川を渡り、カナン地に入ってから各民族との戦いと勝利。これらはすべて主の力によるものであった。12節の「スズメバチ」とはカナン地を襲った主からの恐怖感のたとえである。→ヨシュア記2:9~11、5:1、6:27

そしてイスラエルの民はカナン地の民が住んでいた町々に住み、自分で植えなかったぶどう畑とオリーブ畑で収穫し食べている。

これらはみな主の守りと導きと祝福のゆえであった。以上ここまではヨシュアが主なる神に代わって過去にイスラエルに与えた恵みを語ったものである。

[14-15]「今、あなたがたは主を恐れ、誠実と真実をもって主に仕え、あなたがたの先祖たちが、あの大河の向こうやエジプトで仕えた神々を取り除き、主に仕えなさい。主に仕えることが不満なら、あの大河の向こうにいた、あなたがたの先祖が仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいるアモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを、今日選ぶがよい。ただし、私と私の家は主に仕える」

ここはヨシュアが民の指導者としてイスラエルの民に呼びかけている箇所である。ヨシュアは民の指導者であるが、人々に信仰を強制せずに、それを自発的な選択の問題として彼らの前に置いている。13節までに述べてきた素晴らしい恵み、祝福を与えてくださった主なる神に誠実と真実をもって仕えるか、あるいは彼らの先祖たちが仕えた偶像の神々やこのカナン地の先住民族が信じている偶像の神々でもどれでも、あなたがたが仕えようと思うものを、今日選ぶがよいと迫る。

唯一の真の神か、人間の頭で作り出した偶像の神々か、永遠のものか、空しく実体のないものかを選ばせる決断である。しかしヨシュア自身は言う。「ただし、私と私の家は主に仕える」(15)

ヨシュアは民に信仰を強制しないが、自分の立場ははっきりと示して人々の前に証している。ヨシュアがこのように自分の信仰を語った背景には、イスラエルの民の中には偶像の神々に魅力を感じている者たちがいたからではないだろうか。

カナンの地の農業神や豊穡の神々であるバアル、アシュタロテ、アシェラなどはカナンに定着し農業に携わるようになっていたイスラエルの民にとっては、より一層の豊かな収穫のための誘惑となったのではないか。もしそうなら彼らは過去に受けた主の恵みをすっかり忘れていてということであり、また今受けている地から生じる豊かな産物や外敵からの守り、戦いにおける勝利、カナンでの定住といった祝福もすべて主から来ているということをおぼえておられることになる。彼らはそれに慣れてしまってもう当たり前のように思っているのかもしれないが、それらはすべて主の恵みなのである。

「のど元過ぎれば熱さ忘れる」ということばがあるが、大変な時、苦しい時には「主よ、主よ」と助けや守りを叫ぶ求め、それらが通り過ぎてしまうと途端に不信仰になって目の前のことしか考えなくなる。人間というものは非常に身勝手な存在なのである。

[16-18] ヨシュアの挑戦に答えて民も「私たちが主を捨てて、ほかの神々に仕えるなど、絶対にあり得ないことです。……私たちもまた、主に仕えます。このお方が私たちの神だからです」と誓う。

[19-20] 立派なことばであるが、ヨシュアはこの民の答えに何か本心ではないものがあるのに気がついたのであろう。彼は言う。「あなたがたは主に仕えることはできない。主は聖なる神、ねたみの神であり、あなたがたの背きや罪を赦さないからである。あなたがたが主を捨てて異国の神々に仕えるなら、あなたがたを幸せにした後でも、主は翻って、あなたがたにわざわいを下し、あなたがたを滅ぼし尽くす」

その理由は

①主は聖なる神である。「聖」というものの本質は「分けられている」ということであり、人間とは全く違うお方で罪のないお方であり、偶像の神々と一緒にすることはできないお方である。そして主は聖であるゆえに罪を憎まれる。

②主はねたむ神である。偶像の神々を拝み、主なる神をも拝むというように両方の顔を立てればよいということは絶対にない。これは十戒の中でもはっきりと書かれていることである。→出20:3-6

主はこのようなお方であるので、彼らの背きや罪を赦さない。さらにそのような異国の神々に仕えるなら、たとえ幸せになっていたとしても主はもう一度彼らにわざわいを下し、滅ぼし尽くすとも言われる。これらのことばに主なる神の御性質が現わさ

れている。

[21-23]「民はヨシュアに言った。『いいえ。私たちは主に仕えます。』」(21) これは二度目の誓いである。(一度目は18節) それでヨシュアは「主を選んで主に仕えることの証人はあなたがた自身です」と彼らに迫り、これに対して彼らは「私たちが主の証人です」(22)と答える。彼らは口先だけでなく、心の中からも生活の中からも偶像、異国の神々を取り除き、主にのみ従わなければならない。

[24]「民はヨシュアに言った。『私たちの神、主に仕え、主の御声に聞き従います。』」

これで三度目の誓いである。

[25]「ヨシュアはその日、民と契約を結び、シェケムで彼らのために掟と定めを置いた」

ヨシュアはここでモーセのように仲保者としての役割を担い、民と契約を結んだ。「掟と定めを置いた」とはモーセの律法以外の新しい掟と定めという意味ではなく、契約の内容である誓いのことばを書き記したという意味である。

[26-27]「ヨシュアはこれらのことばを神のみおしえの書に書き記し、大きな石を取り、主の聖所にある櫛の木の下に立てた。ヨシュアは民全体に言った。『見よ、この石は、私たちに対して証しとなる。この石は、主が私たちに語られたすべてのことばを聞いたからである。あなたがたが自分の神を否むことがないように、これはあなたがたに対して証しとなる。』」

ヨシュアが立てたこの石は民が誓ったことの証拠となった。イスラエルにおいて石はしばしば主がなさった様々な出来事のしるしとなった。→創世記31:44~53。ヨシュア4:1~7、Iサムエル7:12

[28] こうしてヨシュアは民をそれぞれ自分の相続地に送り出した。

この24章の時点ではカナン入国の時よりかなりの年数が経っており、イスラエルの十二部族はそれぞれの割り当てられた相続地に住んでいた。

[29-30]「これらのことの後、主のしもべ、ヌンの子ヨシュアは百十歳で死んだ。人々は彼をガアシュ山の北、エフライムの山地にあるティムナテ・セラフに葬った」

ヨシュアはエフライム部族の出身であり、主の命によりエフライムの山地にあるティムナテ・セラフの土地が与えられていた。→ヨシュア19:50 ここはシェケムより南西に約30キロメートルの地。ヨシュアはこの地に葬られた。ヨシュアはモーセの後を継いで走るべき道のりを走り終え、その生涯を全うしたのである。

[31]「ヨシュアがいた間、また、主がイスラエルのために行われたすべてのわざを経験して、ヨシュアより長生きした長老たちがいた間、イスラエルは主に仕えた」

これがイスラエルの現実の姿であった。いくら当事者たちが誓っても二代目、三代目となっていくうちに、その誓いは忘れられ、土着の宗教が取り込まれ、主のみこころにかなわない道に進んで行くというのがイスラエルの歴史に繰り返されるパタ

ーンである。そしてそれは信仰の継承ということがいかに大切なことであるかということを知っている。親だけではなく子や孫にもしっかりと信仰を受け継がせるように努力しなければならない。→申命記6:6~7

[32]「イスラエルの子らがエジプトから携え上ったヨセフの遺骸は、シェケムの地、すなわち、ヤコブが百ヶシタでシェケムの父ハモルの子たちから買い取った野の一面に葬った。そこはヨセフ族の相続地となっていた」→創世記33:18~19

「百ヶシタ」は羊百頭分に相当する金額。

[33]「アロンの子エルアザルは死んだ。彼は、自分の子ピネハスに与えられた、エブライムの山地にあるギブアに葬られた」

「ギブア」…シェケムの南約50キロメートルの地。

イスラエルの指導者として活躍したヨシュアも、祭司エルアザルも死に、エジプトから携えられてきたヨセフの遺骸も葬られた。

一つの時代が終わった感がする。しかし、神の国の歴史は死と葬りをもって閉じられることはない。それは永遠に輝く栄光の世界へと続いていくのである。

ヨシュアは自分が地上を去る日が近いことを知ってイスラエルの民を集めて、イスラエルを守り導き、豊かな恵みを与えてくださった主なる神を信じ従うか、それとも偶像の神々に従うか、どちらでも選ぶがよいと迫った。民は主に従うことを誓ったが、信仰は口先だけでなく心も、行動も生き方もみな繋がっているべきものである。口で告白し誓ったことは私たちがその生き方の中でそれを表していく必要がある。口で信仰告白しても、その生き方がそれを否定するようなことであってはならない。

イスラエルの民は主なる神を信じ従って行った時に神からの豊かな守り、導き、祝福を受けた。

私たちも神の御子イエス・キリストを救い主として信じ受け入れ従うことによって豊かな祝福を受ける。罪赦され、神の子とされ、平安、慰め、守り、導き、喜び、そして永遠のいのちが与えられる。これは物質的なものではないが、その祝福はこの地上の世界において実を結ぶ。

私たちはまことの神に従うことを選び取り、誓いを新たにしてこの主なる神を恐れ、愛し、喜び、感謝し、祈りつつ従って行きたい。あなたはどちらを選ぶのか。